

ミニバスケットボールプレイヤーにおけるミスプレイの構造分析

村上雄大

森本吉謙

キーワード：ミスプレイ，構造分析，ファンダメンタル

Structural analysis of the misplay in Mini Basketball player

Yuta Murakami

Yosikata Morimoto

Abstract

This research is conducting the misplay and the structural analysis of reality in a mini basketball, and clarifying structure of a misplay.

Highest misplay was a path mistake. Furthermore, it was shown that comparatively many mistakes at the whole play the miss further. The mini basketball seldom covered with the research on the general game of a misplay and a basketball was checked comparatively in much. The dribble showed the comparatively high numerical value in the misplay. The misplay from which many were rarely taken up was checked by the mini basketball game. It was suggested that the dribble had one possibility of the main misplays. When a boy and a woman divided and a misplay was able to be seen, especially the path error of both the boy team and the female team was found. Moreover, a dribble mistake and travelling showed the comparatively high numerical value. Many a sixth grader's errors checked the male and the woman. Time to participate was long. Moreover, the sixth grader often held the ball. Therefore, the error increased. Furthermore, a different result was shown by this research although it was told that a misplay was in the tendency to almost appear in a defeat team. Furthermore, the number of times of the attack of all the games was 1316 times. It is thought that I need to practice in order to master a basic portion.

Key word : Play Miss, Structural analysis, Fundamental

I. 緒言

バスケットボール競技の試合の現場で、よく「あの場面でのミスがなければ、あれさえなければ」ということをよく耳にする。

バスケットボール競技とは、ハビット(習慣)ゲームといわれる半面、ミスのスポーツとも呼ばれている。バスケットボールは特性やルールによって動きなどが制限されているため、極めてミスが発生しやすいスポーツである。このことから、ミスが発生しやすいのがこの競技の特徴であると認識し、且つミスが発生することにより勝敗への影響があることを考慮し、「つねに変化するゲーム状況に応じてその状況を解決」(シュティラーラ、1993)できるように、日ごろから練習しなければならないとされている。

バスケットボールが創案されたのは、1891年にアメリカのマサチューセッツ州スプリングフィールドにある国際YMCAトレーニング・スクールで、体育担当の教師ジェームス・ネイスミスによって冬季に屋内で行う新しいボールゲームとして誕生した。最初のバスケットボールは、13のルールでボールはサッカーボールを使用した。体育館のギャラリーに桃を入れる籠を下げ、そこにサッカーボールを入れ合う、今のバスケットボールの原形が生まれた。発祥の地である国際YMCAトレーニング・スクールには各国から留学生が来ており、彼らが卒業後母国へバスケットボールを伝播する役割を果たした。1932年に国際バスケットボール連盟(FIBA)が結成されたときの加盟国数は8カ国であったが、2008年には、213カ国・地域にのぼっている。

日本では、1891年スプリングフィールドのYMCAの訓練校で行われた世界初の試合に参加した石川源三郎が、初めてバスケットボールをプレイした日本人といわれている。1908年、国際YMCAトレーニング・スクールで学んで帰国した大森兵蔵が、東

京YMCA体育主事となって日本に本格的にバスケットボールを伝えた。その後1913年に、F.H.ブラウンが北米YMCA同盟からの協力主事として来日し、関西の(京都、大阪、神戸)のYMCAで指導したのが契機となって本格的に普及し定着した。

一方、ミニバスケットボールは、1965年東京で「教室」の形で始まった。ミニバスケットボール(Minibasket ball)とは、11歳以下により行われるバスケットボール競技のことである。日本では12歳以下の小学生を対象として行われる。目的は、競技スポーツとしてではなく、「友情・ほほ笑み・フェアプレイの精神」のもと、普及と育成を目的としている。国際的な競技の運営団体として国際バスケットボール連盟のミニバスケットボール部門があり、日本では日本バスケットボール協会の加盟団体である日本ミニバスケットボール連盟が運営に当たっている。日本では1970年に京都府バスケットボール協会創立50周年記念としてミニバスケットボール大会が開催され、これが第1回全国ミニバスケットボール大会となる。1976年に日本ミニバスケットボール連盟が設立され、1977年の第8回大会より主催に加わる。全国大会は毎年3月に開催されており今年で43回を迎える。

また、バスケットボール競技は1981年当時13条のルールで行われることから始まった。以来120年以上の年月がたった今日、ルール改正を繰り返し、技術・戦術相互に規制しながら発展してきた。24秒ルールの改正、ノー・チャージ・エリアサークルの登場等、さらにバスケットボールの競技特性の一つである「ゲームのスピードアップ」がより推進されることになると考えられる。これにより、オフENSEの試攻回数増加などが課題としてあげられる。

このようなルール等の変化の中で、ミニバスケットボール自体はルール改正等があ

るわけではないが、育成という視点から考えると、今後ゲームのスピードアップ化対応していかなければならない。しかし、技術的に未発達な子どもが、速い展開のゲームについていこうとすると、どうしてもミスが誘発されてしまう恐れがある(倉石、1996)。よって、子どもたちのミスについて把握していることは、指導していく上で、重要な問題である。しかし、研究分野においてこの競技が扱われることは少ない。バスケットボール競技におけるミスプレイに関しては様々な研究(吉井、1969；岡本、1989；倉石、1996)が行われているが、研究対象が、技術面で発達しているプレーヤーを対象としているため、技術的に未発達なミニバスケットボールプレーヤーは傾向が異なっていくと考えられる。

Ⅱ. 研究目的

本研究では、ミニバスケットボールでのミスプレイとその内実の構造分析を行い、ミスプレイの構造を明らかにすることである。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

平成23年7月3日、16日、17日の宮城県ミニバスケットボール連盟仙台ブロック主管に行われた大会の中の男子5試合、女子5試合計10試合を対象とした。対象チームは、男子4チーム、女子6チームであった。

2. 分析方法

分析方法は、10試合におけるミスプレイをVTRから視覚的に抽出した。VTRの撮影は、筆者がビデオカメラを用い、2階ギャラリーの一面を見わたせる場所から撮影した。

3. ミスプレイの分類

ミスプレイの分類については長野・和田野(2007)の分類を引用し、技術上のミスプ

レイをパスミス、ドリブルミス、キャッチミスとし、ルール上のミスプレイを、ドリブルバイオレーション、トラベリング、ラインクロス、キックボール、3秒ルール、5秒ルール、30秒ルールとした。

Ⅳ. 結果及び考察

1. ミスプレイの全体傾向

図1は全体傾向としてのミスプレイの割合である。全体傾向としてのミスプレイの割合として、パスミスは37.4%を示した。ついでドリブルミス24.2%、トラベリング17.9%、キャッチミス13.9%、ラインクロス3.3%、ドリブルバイオレーション2.3%、3秒ルール1.0%という数値を示した。キックボール、5秒ルール、30秒ルールはそれぞれ0%であった。全ミスプレイの中で、パスミスが最も高い数値となった。また、技術上のミスプレイ全302回中パスミスとキャッチミスを合わせた、パスが原因となるミスプレイは、155回約52%と全体の約半数の数値を示した。長野・和田野(2007)らは、「技術上のミスプレイのパスとキャッチに関して改善すべき点が多々ある」と報告している。研究の対象は大学女子であったが、今回ミニバスケットボール競技でも同様のことがいえると考えられる。パスは「ドリブルよりもはるかにはやくボールを進めることができ、より相手を欺いてバスケット下へとボールを進めることができる」(武井ら訳、2000)ため、試合での使用頻度も高くなるため、「パスというプレイを意識し、徹底して練習を行わなければならない」(中川、2006)と考えられる。

また、ドリブルミスとドリブルバイオレーションをドリブルが原因となるミスとすると、比較的高い約30%という数値を示した。このことから、ミニバスケットボールでは、一般のバスケットボール競技の研究の中であまり取り上げられていないミスプレ

イが、ミニバスケットボールでは比較的多く確認された。ドリブルが原因となるミスは、ミニバスケットボールでは、主なミスプレイの一つとして特に注意して練習に望まなければならないと考えられる。

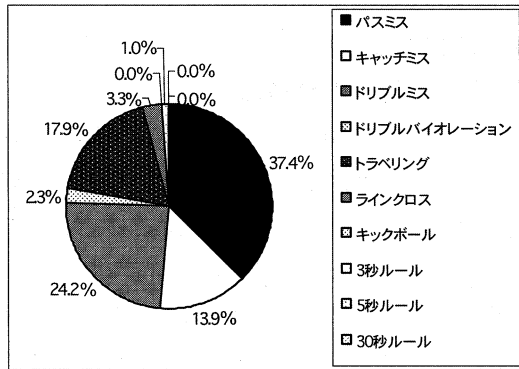


図1 全体傾向としてのミスプレイの割合(%)

図2は男女間におけるミスプレイの分類である。男女別でミスプレイについてみると、ミスプレイの中で、パスミスは、男子チーム57回、女子56回と男女特に多くみられた。今回ほとんどのチームがプレスディフェンスを使用しパスカットを頻繁に狙ってディフェンスを行っていた。そのためディフェンスによるプレッシャーでパスミスが誘発されたと考えられる。また、男女ともに、トラベリングが、男子チーム32回、女子チーム22回と比較的高い数値を示している。トラベリングの主な発生要因は、ドリブルの開始時、ストップ時、ピボット時があげられる。トラベリング自体はルール上のミスプレイではあるが、ピボット、ボールのつきだし、パスの出す場面などで発生する技術的な要素の多いミスプレイであるため練習時より特に注意して練習しなければならないと考えられる。

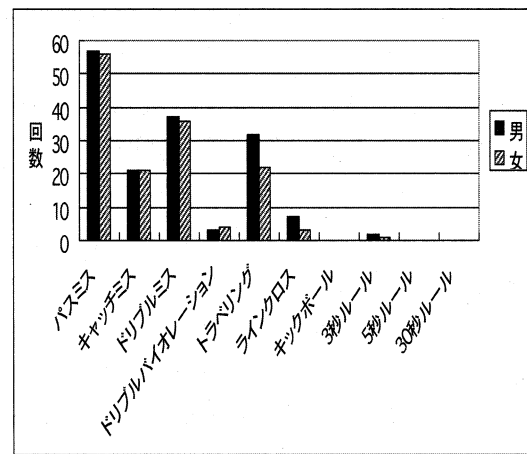


図2 男女間におけるミスプレイの分類

図3、4は学年別におけるミスプレイの分類したものである。男女ごとに学年別で見ると、男女ともに6年生のミスが多くみられる。5年生以下は大きな差がみられなかった。このことから、チームのミスは6年生が絡んでくると考えられる。経験時間の長い6年生のミスが多い理由に、6年生は各チーム多く試合に出場していて、ボールによく絡んでいるためこのような結果が出てきたと考えられる。ミニバスケットボールのルールで、「第3Qまでに10人以上出場させなければならない」とされている。このため、各チーム下級生を前半では起用していたが、後半では、6年生が主な出場選手となりプレイしていた。このため、必然的に6年生のミスが多くなったと考えられる。

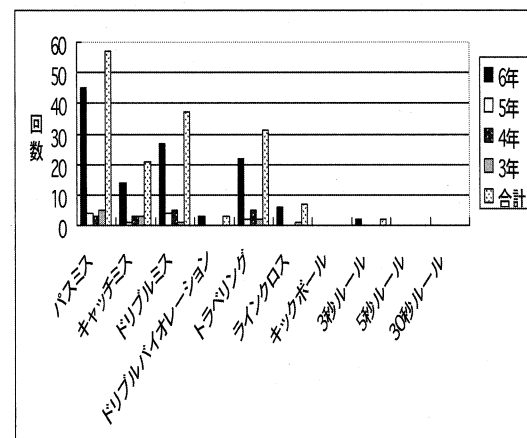


図3 学年別におけるミスプレイの分類(男子)

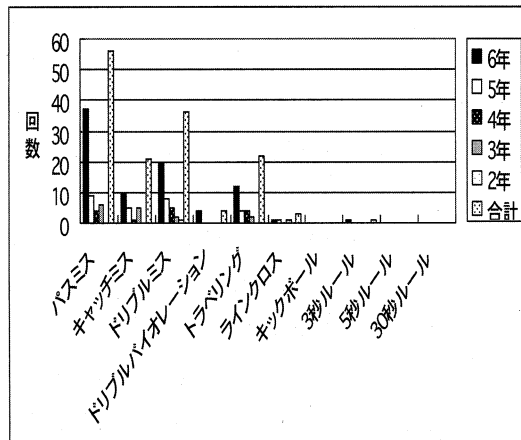


図4学年別におけるミスプレイの分類(女子)

2. 1試合毎におけるミスプレイ

1試合ごとのミスプレイに関して、4試合が勝ちチームのミスプレイの総数が少なく、6試合が勝ってはいるがミスプレイの総数も多いという結果になった。一般のバスケットボールでは、負けチームにミスプレイが多く現れる傾向にあると言われている。しかし、本研究では異なる結果が示された。このことについて、今回、勝ちチームの特徴は、相手チームのミスプレイに乗じた試攻からのシュートがうまくいったためと考えられる。「攻撃開始の原因が、ディフェンスリバウンドやスローインからよりもミスプレイから開始された場合の攻撃成功率が最も高い」(石川ら、1981)と言われている。相手のミスからの攻撃を確実に決めた結果だと考えられる。

3. 試合での攻撃回数とミスプレイ

また、全10試合の攻撃回数を調べ、攻撃回数に対し、ミスプレイの割合について考察した。吉井(1977)を参考に「相手チームのシュート成功数+相手チームフリースローの最後の成功本数+自チームのディフェンスリバウンド数+自チームのオフenseリバウンド数+自チームに対する攻撃中のファール数+相手チームのミスプレイ数」を使用し攻撃回数を算出した。

その結果、攻撃回数は1316回となった。攻撃回数1316回に対するミスプレイの全

本数302回の割合は、22.9%であった。また、技術上のミスプレイ228回の割合は、17.3%であった。仮に10回攻撃したとして、約2回がミスの起こる可能性がある。さらに4回のミスのうち3回は技術上のミスが起こる可能性がある。このことについて、バスケットボールが「ミスのスポーツ」(日本バスケットボール協会、2002)であり、今回の対象が技術的に未発達なプレーヤーであるが、「攻撃のつぎは防御であり、チームの力の強弱に関わらず、規則によってボールを所有する機会は、同等に与えられている。それゆえに1回のボール保有で、必ず1回のシュートができ、しかも、1回で終わるとすれば、両チームの野投試投数は常に同数になり、勝敗を決めるのは、その優劣のみとなる。しかし、実際のゲームにおいては、ボールを所有しても、1回もシュートすることなしにその所有を失うことがある半面、1回のボール所有で、何回もシュートし得ることもあり、チームの技術の優劣、強弱によって相当数の差ができる」(吉井、1977)ため、ミスが試合を決定する要因になる可能性がある。また、「敗者チームは、攻めてはミスを繰り返す効率の悪いゲームを展開する」(石川ら、1981)ため、日ごろから「パスの出し方やボールの保持の仕方、ピボッティング等のファンダメンタルの部分を選手個々が習得することが必要不可欠」(中川、2006)だと考える。

V. 結論

本研究では、ミニバスケットボールでのミスプレイとその内実の構造分析を行い、ミスプレイの構造を明らかにすることである。

一般のバスケットボール競技同様、全ミスプレイの中で、パスミスが最も高い数値となった。

ドリブルが原因となるミスプレイも全ミ

スプレイの中で比較的高い数値を示した。一般のバスケットボール競技の研究の中であまり取り上げられていないミスプレイが、ミニバスケットボールでは比較的多く確認された。このことから、ドリブルが原因となるミスは、ミニバスケットボールでは主なミスプレイの一つの可能性があると示唆された。

男女別でミスプレイでは、ミスプレイの中で、パスミスが男女チーム特に多くみられた。また、ドリブルミス、トラベリングが、男女ともに比較的高い数値を示した。男女ともに6年生のミスが多くみられた。出場時間が長く、よくボールを保持していたためミスが多くなったと考えられる。

また、一般のバスケットボールでは、負けチームにミスプレイが多く現れる傾向にあると言われているが、本研究では異なる結果が示された。

また、全10試合の攻撃回数は、1316回であった。10回攻撃したとして、約2回がミスの起こる可能性があり、さらに4回のミスのうち3回は技術上のミスが起こる可能性がある。試攻回数が同数の場合ミスが勝敗を決定する要因になる可能性があるため、日ごろから「パスの出し方やボールの保持の仕方、ピボッティング等のファンダメンタルの部分を選手個々が習得することが必要不可欠」(中川、2006)だと考えられる。

VI. 今後の課題

今回の研究に使用した資料の総数が少なく、対象の習熟度が低い、もしくは分散しているため、普遍的な要素の抽出としては当てはまらない。そのため、全国大会レベルを対象として、調査期間を長期化することで普遍的な要素の抽出としては有効な可能性があると考えられるだろう。

また、ミニバスケットボールの対象者は小学生だが、その内実には体力的に未発達

な1年生から、成長期を迎えようとしている6年生までおり、体力的な面から考えると、学年別での検討を行う際、試合を学年別で分ける等の体力的な面への考慮が必要だと考えられるだろう。

さらに、本研究をより実践的にするために、各ミスプレイの出現した状況を把握することが考えられる。また、ミニバスケットボールの試合では、ミスプレイが勝敗にどのように影響するか継続的な研究が必要となってくるだろう。

文献

- 倉石平(1996)ディフェンシブバスケットボールー不昧堂出版, pp.78-82.
- 水谷豊(2000)バスケットボールの創成ー体育学研究, 50:249-258.
- 水谷豊訳(1980)バスケットボールーその起源ーYMCA 出版:東京, pp.37-116.
- 守能信次(1994)スポーツとルールの社会学ー名古屋大学出版会, p.114.
- 長野志穂・和田野安良(2007)大学女子バスケットボール競技におけるミスプレイの現状把握に関する報告. 茨城県立医療大学紀要; 115-122.
- 中川文一(2006)モーションオフENSEで戦う. バスケットボールマガジン 3月号ーベースボールマガジン社, 12-15.
- 日本バスケットボール協会(2002)バスケットボール指導教本ー大修館書店, pp.2-17.
- 日本バスケットボール協会(1999)2000年オリンピック以降の国際競技規則の変更についてー日本バスケットボール協会理事会資料, NO.3.
- 日本バスケットボール連盟(2011)全国大会の歩みー日本ミニバスケットボール連盟普及広報委員会資料.
- 日本ミニバスケットボール連盟(2000)大好きミニバスー日本ミニバスケットボール

- 連盟, p1, pp.22-23.
- 石川俊紀・川井浩・小森正巳(1981)バスケットボール分析(第1報) - オフェンスにおける M・P の出現要因について - 日本体育学会号, 32:591.
- 岡本重夫(1989)バスケットボールにおけるゲーム分析に関する研究 - 勝敗を規定する要因 - 奈良教育大学紀要 人文・社会学, 38(1):75-81.
- シュテイーラー, コンツアック, デーブラー, 唐木國彦訳(1993)ボールゲーム指導事典 - 大修館書店, p.63.
- ウドウン, 武井光彦監訳, 内山治樹訳 (2000)UCLA バスケットボール - 大修館書店, pp.104-106.
- 山本剛史・山中博史・穂積豊・佐々木潔 (1993)バスケットボールのゲームにおけるターンオーバーについて. 日本体育学会号, 44B:625.
- 吉井四郎(1969)スポーツ作戦講座 I - バスケットボール - 不昧堂出版, pp.56-59.
- 吉井四郎(1977)バスケットボールのコーチング - 基礎・技術編 - 大修館書店, pp.178-196.
- 渡辺一志・嶋田出雲・一井博・天田英彦・岡田隆造(1987)バスケットボール競技のフリースローにおける意識とミスショットの分析. 日本体育学会(38A):305.